

「と思う」述語文における 「私は」の省略・非省略

曾 儀 婷

1. はじめに

これまでの先行研究では、日本語のモダリティ表現における人称代名詞の使用に関してさまざまな制限があることが明らかにされてきた¹⁾。たとえば、一人称代名詞（話し手・書き手）が自分の意見や考えを述べたり、主張したりする際、よく思考や判断を表す動詞「思う」を使う。その中で、述語「思う」に関しても、一人称代名詞を用いず「～と私は思う」の代わりに「思う」というような人称代名詞用法が一般的であるとされている。すなわち、思考動詞「思う」を用いるとき、一人称代名詞「私」を省略してもよいのである²⁾。しかし、その一方で思考動詞「思う」を使用する際、一人称代名詞がなくてもいいにもかかわらず文の中に用いられることがしばしば見られる。なぜその現象が起きているか、また書き手がどのような意図で「私は」を使用したかの理由を探る必要があると思う。そこで、本研究は思考動詞「思う」の機能を再検討し、「思う」と一人称代名詞「私は」の省略・非省略との関わりを考察する。そして、「思う」と「私は」の使用をみることにより、「一人称代名詞の省略・非省略」が文にもたらす効果を考えることを試みる。

2. 「思う」の意味機能

2. 1 不確実表示用法と主観明示用法

「思う」の意味機能の先駆的研究となっている森山(1992)は、伝達動詞「思う」の機能を大きく二つにわけ、それぞれを「不確実表示用法」と「主観明示用法」と名づけた。「不確実表示用法」は、客観的な事実と自分自身が認知する情報に、「～と思う」をいれることによって自己の判断を下して、その情報が、実は不確実であるということを示す機能である。「不確実表示用法」に対して、「主観明示用法」は個人的な意見、意思、判断に「～と思う」という自己の判断をいれることによって、これはあくまで個人的な判断であるということ明示する機能である。しかし、この二つの機能を持つ思考動詞「思う」は、「私は」の省略と非省略にどのような関連性があるであろう。

(1) A : 花子は学校に来ているかな。

B : もう来ていると思います。

(1)のBの答え「もう来ていると思います」の「と思う」の用法は、森山の言う「不確

実用法」である。これに「私は」を挿入してみるとつぎの(3)となる。

(3) A : 花子は学校に来ているかな。

B : ?私はもう来ていると思います。

(3) をみると、B の答えに一人称代名詞の「私は」をいれると、違和感がある文になってしまう。これまで多くの研究では日本語のモダリティ表現や、認識論の観点などさまざまな研究分野からみた思考や判断を表す動詞とされる「思う」は、その主語は一人称代名詞のみであるという人称代名詞制限がかかるとされてきた。しかし(3)のように、文末「～と思う」の表現形式が使用されるにもかかわらず一人称代名詞の「私は」とともに用いられない、または用いられにくい場合がある。

(4) の「思う」は「主観明示用法」である。「主観明示用法」と「不確実表示用法」との違いは、「～と思う」の機能が不確実を表すというよりも、話し手自分の個人的な意見であることを示すという意味になっていることである。例えば、

(4) 図書館へ行きたいと思う。

(5) 私は図書館へ行きたいと思う。

(4) の「～と思う」はその「主観明示用法」の典型的な例であり、話し手の個人的な意見や考えなど示す機能がある。(5) は(4) の例に一人称代名詞の「私は」を入れた文であり、「私は」を入れてもまったく文に支障をきたすことがない。ただし、(5) は「私は」を入れることによって、違うニュアンスが生ずるであろう。しかし、どんなニュアンスが生ずるかについて森山は説明していない。

(6) 日本の医療制度は間違っていると思う。

(7) 乾杯したいと思います。

(8) 私は日本の医療制度は間違っていると思う。

(9) ?私は乾杯したいと思います。

(6) (7) 両方とも「～と思う」の「主観明示用法」の表現機能をもっている文であり、不確実を表示するわけではなく、むしろ個人的な意見や主張であることを断り、さらにそうすることによって、主張を和らげるとでもいった機能を有している(森山 1992 : 110)。

(8) と(9) は(6) と(7) の文頭に一人称代名詞の「私は」をつけたセンテンスである。しかし、(8) は自然の文であるに対し、(9) のような一人称代名詞の「私は」を使用する乾杯音頭は不可能である。したがって、(9) の「～と思う」の「主観明示用法」の働きを検討する余地がまだあるのではないだろうか。

「～と思う」が文末の基本形で使われた場合、「思う」の主体は話し手であるから普通「私は」は省略することが多い。しかし、(3) ～ (9) などの例をみると、「思う」は人称代名詞制限があるにもかかわらず、一人称代名詞「私は」をいれると不自然を生ずる文になったり、非文になったりする。このことについては、これまで検討されてこなかったが、それをどのように解釈をすればよいかを考察する必要があるであろう。

2. 2 実質的思考動詞と伝達的思考動詞

阿部(1996)は、思考動詞「思う」とその主語の人称代名詞の使用制限に関する考察を行い、動詞「思う」を二つの用法に分けられると述べ、それぞれを「実質的思考を表す」動詞と「伝達的思考を表す」動詞と名づけた。「実質的思考を表す」動詞の「思う」は動作状態性動詞として働き、話し手の現在の思考・心理的状态を表し、「ある」「いる」のような状態性動詞の特徴をもつ。例えば、

(10) 内示が出てから数日は食事ものを通らないほど落ち込み、つくづく今まで転動で家族そろって移動できた幸せを思った。 『朝日新聞』(2005/3/29)

(10)の「思う」は「～を思う」という形をとり、「思う」の内容を表すが、「思う」がない場合に文の意味をなさなくなる。それに対し、「伝達的思考を表す」動詞の「思う」は、「思う」の部分を取り除いても文の意味がほぼ同じであるといえるであろう。次の(11)をみてみよう。

(11) 2、3階でも大変なのに8階建てともなれば、年老いた母のもとからはお日様が奪われてしまいそうだ。日の当たる場所、風の通り抜ける所、未来の子供たちや老人たちの心やすらぐ場所をせめて私はなくないでいたいと思っている。

『朝日新聞』(2005/3/23)

以上の(10)と(11)の例文で示されるよう「思う」の用法には「実質的思考」を表す用法と「伝達的思考」を表わす用法があることがわかる。

「思う」は元々話者の心中の活動(推量・意志・希望・判断など)を描写するという意味記述の性格を持っている。話者の心的態度を表すものであるため、一種のムード形式化したものともいえるであろう。人の心の中のことであれば、外から直接知ることができないため、「思う」の主体である一人称代名詞「私は」をあえて用いる必要がなくなり、省かれることが多い。阿部(1996:148)も「ムード的表現として用いられる場合、普通一人称代名詞主語は省略されることが多い」としている。しかし同時に、(12)(13)のように、表現される場合もある。」という。阿部(1996)は、主語の一人称代名詞が省略されない理由を説明してない。

(12)「おれは東を目指して行った方がいいと思う。」

(13)「良いニュースだと僕は思うよ。」 『阿部(1996:148)』

2. 3 まとめ

以上で見られたように、伝達動詞「思う」についてはいくつもの働きがあることと、動詞「思う」の機能や文にもたらす効果や文全体のニュアンスなども変わってくる、ということなども明らかにされてきた。しかし、これまでの研究成果では「～と思う」という形しか検討されてこなかった。前述したが、「思う」の使用においては人称代名詞制限があるが、「思う」に関する人称代名詞制限に関する研究がまだ少ない。果たして、主語の「私は」の省略・非省略が、「～と思う」文の引用節に関与しているかないかを見る必要があるで

あろう。そこで本研究では、「と思う」の機能を再考察しながら、「私は～と思う」の形式を取り上げ、一人称代名詞「私は」の使用と「～思う」の機能を、組み合わせて考察し、「私は」の省略・非省略が文にもたらす効果を探ることを試みる。

3. 資料分析

3. 1 分析資料と分析手順

考察に使用する資料は2006年5月15日から2006年12月31日までの朝日新聞の読者の投稿欄である。日常生活に非常に身近なものであるため、新聞を選択したわけである。また、日本語を母語とするネイティブが書いた文章でもあるため、文法上の間違いなどの心配もないというメリットもある。分析手順としては、まず、投稿欄の中に使用された「私は」と「と思う」の出現回数を数え、そして、なぜ動詞「思う」の主語「私は」が省略されたり、省略されなかったりする理由を探ってみる。また、この研究は一人称代名詞のみをみるため、アスペクトの問題を考慮しないことにする。

3. 2 分析結果

255篇の朝日新聞の投稿欄を集めた。そのうち、「～と思う」の文型が現れた投稿欄の数が185篇であるに対し、「私は～と思う」の文型が現れた投稿欄の数は70篇しかなかった。また、「～と思う」の文型が数は218個であるに対し、「私は～と思う」の文型の数は75個であった。「私は～と思う」の文型が少ないということは、「話し手が外部世界の事象を認定したり、自己を内省したりすることによって、発話時に得られた認識を表示する」という「思う」の定義にも裏付けられるであろう。

「～と思う」の思う内容を項目別に分けた結果、「～と思う」の「～と」の前に現れた語は様々のかたちが見られる、「私は～と思う」にしか見られない項目もあれば、「～と思う」にしか見られない項目もある。しかし、「私は～と思う」と「～と思う」、二つの文型の内容を意味的に考えてみると、次の(14)のよう、いくつかのパターンがあると考えられる。

- (14) A : 希望・意思を表すパターン「(私は) ³⁾たい・よう+と+思う」
B : 終止形当然の意味を表すパターン「(私は) べき+と+思う」
C : 理由原因を説明するパターン「(私は) のだ+と+思う」
D : 推量不確定を表すパターン「(私は) だろう・ではないか+と+思う」
E : 意見・判断を表すパターン「(私は) 言い切り+と+思う」
 (E1) 形容詞+と+思う (E2) 形容動詞+と+思う
 (E3) 名詞+と+思う (E4) 動詞+と+思う
F : 「(私は) ～ (仮定助詞の「ば」) +と+思う」
G : その他

表 1

| パターン | 意味 | 「私は～と思う」 | | 「～と思う」 | |
|------|-----------------|----------|--------|--------|--------|
| | | 回数 | % | 回数 | % |
| A | 希望・意思を表す | 17 | 22.67 | 37 | 16.97 |
| B | 終止詞「べき」による当為を表す | 3 | 4.00 | 12 | 5.50 |
| C | 原因・理由を説明 | 1 | 1.33 | 13 | 5.96 |
| D | 推量不確定を表す | 11 | 14.67 | 23 | 10.55 |
| E | 意見・判断を表す | 41 | 54.66 | 126 | 57.8 |
| F | 仮定 | 0 | 0.00 | 6 | 2.76 |
| G | その他 | 2 | 2.67 | 1 | 0.46 |
| | 合計 | 75 | 100.00 | 218 | 100.00 |

表1で示したように、「私は～と思う」の文型では、「～（仮定助詞「ば」）＋と＋思う」以外のパターンがみられ、「～と思う」ではすべてのパターンが見られた。また、「私は」の省略の様相によって、表2のように、三つのグループに分けられる

表2

| グループ | パターン |
|------|-----------------------------|
| 1 | A「希望・意志を表す」用法・D「推量不確定を表す」用法 |
| 2 | B「終止詞の『べき』」・C「原因・理由を説明」 |
| 3 | E「主観的な意見を表す」 |

表2は、三つのグループの分類である。次に、二つの文型がそれぞれのパターンとどのような関係があるか、また「私は」の省略と非省略が文にはどのような効果をもたらすかについて、文の意味を考えながら理由を探してみる。

3. 3 考察

3. 3. 1 「希望・意思を表す」と「推量不確定を表す」

意思・希望の文は、それらが〈表出〉⁴⁾の発話・伝達のモダリティで使われている限り、主体を表す名詞句の人称代名詞が一人称代名詞に限られる人称代名詞制限を有している(仁田 1991)。したがって、意志や希望の文は、二人称代名詞や三人称代名詞の主体を表す名詞を取りえない。つまり、〈表出〉という文型には、「わたし・ぼく」のような人称代名詞を文中に現れなくても、誰のことを指しているかが分かる。例えば(15)

- (15) 地域の敬老会が公民館で行われた。補聴器をつけて出席した。30人ほどが久しぶりに顔を合わせ、歓談とカラオケで盛り上がった。「岸壁の母」の熱唱もあった。戦中戦後の苦労の数々が思い出され、思わず胸がいっぱいになった。

補聴器で聴力を保ちながら、家族や地域の人と喜び悲しみを共にし、作家の渡辺淳一さんがいわれる「プラチナ世代」を楽しく美しく生きたいと思う。

『朝日新聞』(2006/10/7)

しかし、(16) の用例のように、「～たいと思う」に伴い、主語の部分に「私は」が現れていることもある。

(16) 大学に入って、また必要なところだけをべんきょうして、卒業して、そして何がしたいのだろうか、と思う。もっと大切なことがあるのではないだろうか。私は、勉強を受験のためのただの道具としてしか考えないような大人になりたくないと思う。 『朝日新聞』(2006/11/2)

(17) 現在美術部に所属しています。自分と同じ趣味を持つ人たちと一緒に活動できるのはうれしいことだと思います。スケッチブックに絵を描いていると、前よりも上手になっていくのが分かります。そして、もっと上手になりたいと思います。

私は将来、絵に関係のある仕事に就きたいと思っています。 そのためには絵だけではなく、勉強もしなければなりません。私の夢を両親に語ると、「簡単な夢ではないよ」と言われます。しかし、私はあえて難しい道を選んでみたいと思います。

『朝日新聞』(2006/9/10)

(16) では、引用節の内容が書き手の意思・希望であるにもかかわらず、「私は」が現れている。その理由としては、「私は」の使用によって、自分のことを強調したり、他の人との対照をしたりする可能性が大きい。しかし、今回の調査結果では、「私は～希望・意志＋と＋思う」の文型では、人との対照というより、はっきりとした対照相手が文中で現れなかった。そのため、ここでの「私は」の非省略が対照という機能であるといいくいであろう。「私は」自分の心の中にある希望と意思などを内省というプロセスを経て表明したものであることを強調するために「私は」を使ったのではないかと考える。また、(17) のように、明確な対象を対照とする相手がなく、頻繁に「私は」を使うと、落ち着かない文となりやすいと思われるであろう。日本語学習者の作文でも (17) のようなすわりが悪い文型もしばしばみられる。

次に、Dの推量不確定「(私は) だろう・ではない(か) +と＋思う」についてみる。

(18) 高校生活もあと半年だ。卒業後は進学を志望している。なるべく親に負担をかけないよう、できるところまで頑張りたい。自分の夢をかなえることこそが、支えてくれた両親への恩返しになるだろうと思う。

『朝日新聞』(2006/9/10)

(19) ピーマンは5月下旬から収穫できた。焼いたり、いためたり、サラダにしたりして、取れ立てのおいしさを満喫している。まだまだ衰えを見せず、太い枝には青々とした葉が茂っている。大きくなったのは苗を植えつける20日ほど前に、土に堆肥を埋めておいたためではないかと思う。

『朝日新聞』(2006/9/12)

「ではないか」「だろう」は、不確定の断定、あるいは推定の意味を表すものであるが、「と思う」を推量の「だろう」の後ろにつけると、その推量の内容が話し手の個人的なも

のであることをさらに強調することになる。(18) (19) の「～と思う」の引用節では、話し手が個人的な考えを「～だろうと思う」を使用することによってより強く主張していることがわかる。

一方、主語の「私は」が非省略の場合をみってみる。

- (20) 「いい夫婦の日」(11月22日)に合わせて生命保険関連団体が、40～50代の既婚男女に調査を行った。(中略) 調査結果を分析した先生は「妻が現実的でシビア、夫は賢母幻想にすぎている傾向がみられる」といっている。なぜ、こんな結果が出るのだろうか。

私はまだまだ「夫は仕事、妻は家事」といった考え方が社会全体に強いのではないかと思う。最近は夫だけでなく妻も働きに出ている家庭が多いにもかかわらず、炊事洗濯などの家事は妻に任せ、夫は手伝わないというのが現状だろう。

『朝日新聞』(2006/12/10)

- (21) 自民党総裁選で、安倍官房長官は新憲法の制定を政権公約に掲げた。その理由として冒頭の「占領軍の関与」を挙げている。

安倍氏の主張は部分改正ではなく新憲法の制定だ。現憲法の成立過程を問題視し、丸ごと作り替えるというものだ。これは現憲法を否認する思想で99条違反ではないかと私は思う。

『朝日新聞』(2006/9/14)

(20) (21)がどれも主語「私は」が非省略の例である。実際にDパターンの「(私は)だろう・ではない(か) +と+思う」の「私は」は新しい主題が提起されるために用いられたのである。前述したように、「だろう」や、「ではないか」などの推量詞の後ろに「と思う」をつけると、引用節の内容がより話し手の個人的な考えであることが強調される、という効果も生じるのではないかと考えられる。なぜ「私は」の非省略の現象が出てきたかを、書き手の伝達態度という視点から理由を探る必要があるのである。

以下、文をめぐる発話時における話し手の発話・伝達的態度のあり方を表す発話・伝達モダリティの視点からグループ1の「私は」の非省略を考察することを試みる。

モダリティにおける〈表出〉は、話し手の意志や希望や願望といった自らの心的な情意を、取り立てて他者への伝達を意図することなく発するといった発話・伝達的態度を表したものである。つまり、〈表出〉として一括した意志・希望・願望を表す文は、極めて発話・伝達のモダリティの希薄なものである⁵⁾。また、「だろう」の主な意味・用法は「推量」である。仁田(2000:16)は、推量表現を「命題内容である事態の成立・存在を不確かさを有するものとして、想像・思考や推論の中に捉えるもの」と定義している。すなわち、言表事態を未だ確認されていぬ推し量られたものとして捉え描き出している表現である。そして、話し手があくまでも言表事態を自分の想像・思考の中で捉えたにすぎず、経験的な事実として確認されているわけではないという。話し手の内心思考という点から考える

と、「推量」が〈表出〉の意志・希望・願望と同じで、発話・伝達のモダリティが希薄であろう。「～と思う」の引用内容の発話・伝達のモダリティが消極的であり、婉曲のような働きもあるため、主題の位置にある「私は」があっても、文全体の主張の強さを強調することがないと思われる。

3. 3. 2 「終止詞『べき』による当為を表す」と「原因・理由を説明する」

(22) 司法により刑の判決が出たら機械的に執行に移してもよいのではないだろうか。

しかしながら、人の命にかかわることであるので、より慎重にすべきだということは言うまでもない。そのためには、ひとつの方法として、決定は法相個人の署名でなく、委員会などの複数の人にゆだねるべきだと思う。 『朝日新聞』(2006/10/3)

日本語の「べき」という言葉は、「そうするのが当たり前だ」のような意味があり、文中に用いると当然・義務のような強い言い切る表現となる(高梨 2002)。しかし、「べき」の使用は一般的に話し手の意志に関係がないと認識されており、自分がそうしなければならない行動には使うことができない。(22)の例の「～べきだと思う」は社会に対する原則として立てて欲しい方針や話し手の建前の意味が見られる。話し手が自分の考えをより強く言うため「～べきだと思う」を使ったが、主語の「私は」が見られていない。理由としては、「～べきだと思う」の引用節は、社会通念上の考え、つまり「～と思う」の内容が世間一般に共通して認められはざだと話し手が考えるため、「私は」を主語の位置にいと、引用節の内容を極端に強調してしまう恐れがあり、個人の意見であることが強く出すぎて、社会の通念と矛盾が生じてしまうのではないかと考える。実際、「私は～と思う」の文型では「～べきだと思う」の出現回数が3回しか見られなかった。

(23) 政党助成金が作られたのは、選挙権がない企業・団体の献金を禁止した代わりに国民の浄財を配分するというものである。ところが、制度が出来ると政党助成金はもらうは、企業献金も受けるはで、まるで丸もうけの制度になった。

私は、助成金の趣旨からいって企業から献金をされた政党には、その献金相当の助成金を減額するべきだと思う。 『朝日新聞』(2006/12/23)

(24) 安倍氏は公約の前面に憲法改正を打ち出した。武力行使できる憲法に改正されるということは、自分の子どもや、そのまた子どもが戦争に行く時代が来るかも知れないということだ。遠くない未来かも知れない。

私は、戦争を知らない世代だが、このことにもっと国民一人ひとりが敏感になるべきだと思う。 『朝日新聞』(2006/9/14)

(23)(24)の例は主語の一人称代名詞「私は」が省略されていない、「私は～べきだと思う」の文型に出た二つの「私は」とも新しい段落の冒頭として使用されたものであり、話題を転換するために使用されたものである。(23)(24)の「私は」を省略すると、文の意味が分からなくなることがないが、「私は+べきだ+と思う」の使用によって、より書き手の自分の意見や心境を強調することができる。

次に、Cの理由・原因を説明するパターン「(私は) のだ+と+思う」をみってみる。

- (25) もちろん、子を持ちたいという切なる思いも理解しているつもりです。ですが、人間がこのような命の操作をしてよいのかどうかの結論はまだ出せていないのだと思います。 『朝日新聞』(2006/10/13)

「～のだと思う」の「のだ」は理由や根拠を強調した断定の意味を表したり、事柄の様子やあり方を強調して説明する意を表したりする(仁田 2000、野田 2002)。(25) で用いられた「～のだと思う」の使用によって話し手が自分の意見・主張がより強く説明される。これは「～べきだと思う」と同じ働きするのであろう。

しかし、Cの理由・原因を説明するパターンが、「～と思う」の文型では出現回数13回もあるに対し、「私は～と思う」の文型では1回しかない。その一例は以下の(26)である。

- (26) 日本では子が親を殺し、友だちを殺し、大人が性のはげ口として小学生をレイプして殺す事件が目につく。

一体、何がそうさせるのか。私はテレビの悪影響がまさに今、日本人の心をむしばんでいっているのだと思う。これでもか、これでもかと刺激がエスカレートする番組の何を多いことか。 『朝日新聞』(2006/10/25)

(26)の「～のだ」も(24)(25)と同様、話し手が自分の主張・意見を述べるために使われたが、(26)は主語の「私は」が省略されなかった。それは、前の文とかわりのあるのではないかと考える。「一体、何がそうさせるのか」という質問に対し、次の文では「私はテレビの悪影響がまさに今、日本人の心をむしばんでいっているのだ」という答えを話し手は出している。前文の質問は、書き手自身が聞き手(読み手)の皆に出したものであるため、他の人がどう答えるか分からない。したがって、(26)の「私は」の非省略は、他の人との「対照」の一つであると考えられる。

グループ2の「私は」が話題転換や対照など理由で非省略されたようである。しかし、モダリティの視点からグループ2の「私は」の非省略を考察することを試みる。

「のだ」は、モダリティの研究においては、「説明のモダリティ」に属する。野田(2002)は、「(説明)のモダリティとは、典型的に、先行する文で示された内容が聞き手に分かりやすくなるように、(事情)〈帰結〉などを後の文で示すものである」と述べた。つまり、説明の「のだ」は、言表事態を解釈として聞き手に受け入れさせよう、というような発話・伝達意図を担うものである。すなわち、説明の「のだ」が発話・伝達のモダリティでは、積極的な姿勢が見られるであろう。

一方、「べき」はモダリティの研究においては、「評価のモダリティ」に属し、ある事態が実現することに対する「必要だ、必要でない、許容される、許容されない」といった評価を表すものである(高梨 2002)。また、「べきだ」は基本的にはもっぱら「話し手の発話時の評価」、それも「当為判断」⁶⁾を表す形式である。「話し手の発話時の評価」とは、「客観的必要性・許容性」を表すことができないことを示す。客観的な必要性・許容性を表すこと

ができないことは、主観性のほうが強いと言ってもよいであろう。

発話・伝達のモダリティにおける「のだ」と「べき」の機能をみると、両方とも積極的な特徴がみられる。「～と思う」の引用内容が積極的な特徴であるため、「私は」の省略によって、文全体の意味を和らげる効果が生じると考えられる。

4. まとめと今後の課題

日本語のモダリティが人称代名詞と密接に関連すると思われる点について、従来の先行研究の成果を土台にし、日本人の書いた新聞投稿欄を資料として、文章の中に使用された「私は～と思う」と「～と思う」の文型を取り出し、一人称代名詞の「私は」の省略・非省略と、「～と思う」の内容とどのような関連があるか見てきた。まず、出現回数を見れば、「私は～と思う」文型の回数は「～と思う」文型の回数より少ない、つまり、動詞「思う」が使用される際、主語の「私は」はよく省略される。その理由としては、日本語の動詞「思う」は使用上には人称代名詞制限があるからである。

今回半分以上も占めたグループ3は述べることができなく、別稿に譲ることにする。

¹⁾ 寺村(1984)、仁田(1991)、森山(1992)、阿部(1996)などが詳しい。

²⁾ 過去形の「思った」の主語は三人称代名詞でも使用できるが、この研究では三人称代名詞には触れず、一人称代名詞の制限のみをみることにする

³⁾ ここでの(私は)は「私は」を省略する意味ではなく、「私は～と思う」の文型パターンも含めて考えたものである。

⁴⁾ 仁田(1991:29)を参照。

⁵⁾ 仁田(1991:29)を参照。

⁶⁾ 「当為判断」とは、制御可能な事態にのみ用いられる(高梨2002:119)。

出典

朝日新聞

参考文献

阿部保子(1996)「思考の動詞『思う』とその主語の人称に関する一考察」『湘南文学』30, 東海大学日本文学会, 146-156

高梨信乃(2002)「認識のモダリティ」『新日本語文法選書4モダリティ』, くろしお出版, 80-120

寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』, くろしお出版

仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房

仁田義雄(2000)「認識のモダリティとその周辺」『日本語の文法3モダリティ』, 森山卓郎, 仁田義雄, 工藤浩編, 岩波書店, 79-159

野田春美(2002)「認識のモダリティ」『新日本語文法選書4モダリティ』, くろしお出版, 230-259

森山卓郎(1992)「文末思考動詞『思う』をめぐって一文の意味としての主観性・客観性一」『日本語学』11(8), 105-116